

# 法助動詞とスタイル

大 本 道 央

The Modal Verb and Style

Michio OMOTO

## 0. はじめに

私たち、特に日本人が文章の中で法助動詞を読んだり、書いたり、さらには教えたりする際、一文の中でしかその時や意味を考えない傾向がある。しかし、実のところ文章の中の一文というのはその文章全体のスタイルに支配されて書かれているのである。よって、当然、文中の法助動詞も常にその文章のスタイルの支配下において使用されているのである。したがって、スタイルをまったく無視して法助動詞を使用すると、文章全体のバランスが崩れ、一文一文がばらばらの感じがし、結局、その文章が書かれる意図さえもわからなくなってしまうのである。それだけ法助動詞はスタイルに支配されると同時に、スタイルに対して大きな影響力をもっているのである。

この論文では、法助動詞とそれが用いられるスタイルとの関係について、どのような法助動詞をどのようなスタイルの中で使用すると効果的かということを中心に論じることにする。が、それに先立ち、法助動詞とは一体どのようなものなのか明らかにするために、まず、法助動詞と法性について簡単に述べたのち、法助動詞が使用されるスタイルによってどのような「時」を表し得るのか、その可能性について簡単に述べることにする。その上で、スタイルの中で用いられる法助動詞の意味を説明し、その法助動詞の意味ごとに、その意味の法助動詞がどのようなスタイルで効果的に用いられるのか、を実例を挙げて論じることにする。また、その際、それぞれの意味あるいはスタイルで用いられる法助動詞の間の違いについても、ニュアンスの違いを中心にその都度比較し論じることにする。

この論文におけるこうした探求により実際に法助動詞を使用する際のより深い知識が得られればと考える。

This paper discusses the importance of the modal verbs used in style. Many people, particularly Japanese, use modal verbs just considering the sentence in which they are used.

In such a way, however, we cannot produce well-composed writing, namely the writing in which every sentence is connected effectively and purposefully, because style, which affects and arranges all words including modal verbs in the whole writing, tends to be ignored in the sentences. To produce good writing, therefore, we should at first decide the style appropriate to the content of the writing and then write sentences including suitable modal verbs according to the style.

In this paper, first, we describe the modality of the modal verb to realize what the modal verb is. Then, we discuss which time modal verbs can refer to to learn the possible modal verbs expressing certain time in a style. Last, we explain meanings of modal verbs, and based on the meanings we discuss which modal verbs can be used effectively in which style.

All of the discussion in this paper will provide us good knowledge of how to use modal verbs effectively in writing.

## 1. 法助動詞と法性

法助動詞は法性を表すのに用いられるとされる。それでは、法性とは一体どのようなものであろうか。Quirk *et al.* (1985, p. 219) によると、法性は次のように定義されている。

At its most general, *modality* may be defined as the manner in which the meaning of a clause is qualified so as to reflect the speaker's judgment of the likelihood of the proposition it expresses being true.

また、大塚高信、中島文雄監修 (1982) には法性は次のように定義されている。

…叙述内容に関する話者の心的態度を文法手段によって表したものをいう (…能力・意志…許可・禁止などを…法的意味と認める)。

このことから何がいえるかというと、私が思うに、法性あるいは法助動詞というのは、叙述内容に関する話者の心的態度 (あるいは真実性に関する判断) を示すために、話者の随意のもとに使用されるということである。よって、基本的にはこれがなくてもさほど文意に支障をきたすものでないということである。つまり、話者のもつ文章のスタイルや文脈によって話者が適宜文中に挿入するものだといえる。ゆえに、その使用というのは、一文一文の意味のみならず、筆者のその文章全体のスタイルや文脈の捉え方、すなわち、心的態度によっても決まるといえる。したがって、文章のスタイルというのは法性あるいは法助動詞の使用を決める大きな要因になっているといえる。

## 2. 法助動詞の「時」とスタイル

法助動詞が表す「時」について考えてみると、法助動詞の中には一つの形で文章のスタイルや文脈に応じて現在、過去、未来のそれぞれを表すことができるものもあり、非常に複雑だといえる。それにもまして、あるスタイルの中では、実際に人が捉える「時」と法助動詞の時制は一致せず、そこには「時」とは関係のない微妙なニュアンス（控え目、丁寧さ）がかもし出される。ここでは法助動詞がスタイルの中でどのような「時」を表し得るのかそれが伴うニュアンスを含めて簡単に論じることにする。

「時」を考えると、Quirk *et al.* (1985, p. 175) にもある通り、次の3つのレベルが考えられる。一つは「時」そのものを考える referential level で、一つは「時」を意味的に考える semantic level で、残りの一つは「時」を文法的に考える grammatical level である。特にあとの2つがことばの上では重要である。だが、grammatical level で「時」について考えても、法助動詞の場合にはあまり意味をもたない。それは形の上での現在と過去の区分は実際に人が捉える「時」と厳密な関連がないからだ。よってここでは、実際に捉えられる「時」と比較的厳密な関連をもつ semantic level で法助動詞の表す「時」を区分し、その「時」で使用される法助動詞を考えることにする。つまり、「時」を過去時、現在時、未来時の3つに分け、そのそれぞれの「時」で使用され得る法助動詞を考えるわけである。これにより特定の「時」について中心に書かれる傾向のあるスタイルでは、どのような法助動詞が主に使用されるかわかる（なお、ここであげる例文は、荒木一雄他（1977）を参考にした）。

### 2.1 現在時

現在時を表す法助動詞としては次のようなものがあげられるが、その法助動詞を grammatical level で考える場合、現在時制、過去時制の両形が表れていることは興味深い。

can, could, may, might, must, need, have (got) to, ought to, should, will, would, shall

例えば、次の例文中の下線部には文法的には上のいずれの法助動詞も入り得る。

He \_\_\_\_\_ be there now.

ただし、can に対して could, may に対して might, will に対して would, という grammatical level での法助動詞の対立を考える場合、現在時制に比べ過去時制を用いた方が控え目、丁寧さがかもし出される。

### 2.2 過去時

過去時を表す法助動詞としては次のようなものがあげられるが、その法助動詞を grammatical level で考える場合、過去時制のみが表れていることには問題ないが、中には前の現在時を表す現在時制に対応する過去時を表す過去時制が存在しないものがあること、また、意味に

よっては上の現在時を表す現在時制に対応する過去時を表す過去時制が存在しないことも興味深い。つまり、過去時では現在時ほどスタイルによる選択の幅がないといえる。

could, might, had (got) to, (should,) would

例えば、次の例文中の下線部には文法的には上のいずれの法助動詞も入り得る。

(I thought) he \_\_\_\_\_ be there then.

ただし、should はこの場合 I thought などに導かれる従属節の中でしか使えないし、could, might, would にしても内因的法性以外の意味ではそうでないと思えない（「内因的法性」とは「出来事に対する内的な人間による制御を含むもの」<sup>1</sup>である。3.3 のところでも触れることにする）。

### 2.3 未来時

未来時を表す法助動詞としては次のようなものがあげられるが、その法助動詞を grammatical level で考える場合、現在時を表す法助動詞とまったく同じものが、現在時制、過去時制の両方で表れていることは興味深い。つまり、未来時でも現在時と同様、スタイルによる選択の幅が広いといえる。

can, could, may, might, must, need, have (got) to, ought to, should, will, would, shall

例えば、次の例文中の下線部には文法的には上のいずれの法助動詞も入り得る。

He \_\_\_\_\_ be there tomorrow.

ただし、ここでも現在時を表す法助動詞と同様、現在時制に比べ過去時制を用いた方が控え目、丁寧さが出るといえる。

### 2.4 その他

同じ過去時について言及するのでも、過去の出来事について現在の話者の心的態度を表す場合は、次の形を用いる。ここでもまた法助動詞を grammatical level で考える場合、現在時制、過去時制の両方が表れていることは興味深い。やはり、現在時制を用いるより過去時制を用いた方が控え目、丁寧さが表されるのである。

may/might have p.p., can't/couldn't have p.p., must have p.p., ought to have p.p., should have p.p., will/would have p.p., etc.

例えば、次の例文中の下線部には文法的には上のいずれの法助動詞も入り得る。

He \_\_\_\_\_ been there then.

ただし、ここでの法助動詞は内因的法性の意味でなく外因的法性の意味になることは興味深い（「外因的法性」とは「出来事の可能性に関する人間の判断を含むもの」<sup>2</sup>である。3.3のところでも触れることにする）。

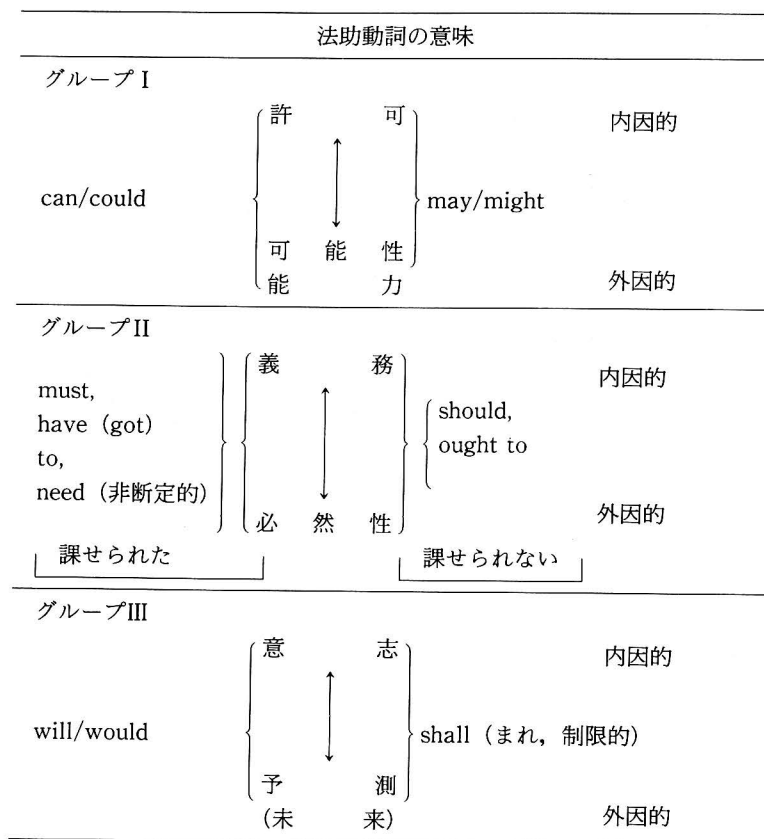
これらのことから、ある法助動詞が現在時で使われているのか、過去時で使われているのか、それとも未来時で使われているのか、を決めるのは、結局、その法助動詞の時制というよりは、それが用いられるスタイルや文脈（上の場合は特に時の副詞が効果的に働いている）であるといえる。そしてさらに、同じ「時」においても、どの法助動詞が使われるかを決定するのはスタイル（控え目、丁寧さを必要とするスタイルかどうかなど）や文脈で、特に may と might, can と could, will と would, のそれぞれどちらを選択するかはスタイルによるところが大きい。つまり、一文一文の意味からというよりは、筆者の文章全体のスタイルや文脈の捉え方、すなわち心的態度によって決まるといえる。

### 3. 法助動詞の意味とスタイル

法助動詞の表す意味について考えてみると、一つの法助動詞で文章のスタイルや文脈に応じ、ふつう複数の意味が表されるし、また、特定のスタイルや文脈ではいくつかの法助動詞をニュアンスの違いはあれ、同じ意味で使うことができ、それが表す意味も非常に複雑であるといえる。ここでは法助動詞がもつ複数の意味を簡単に説明したのち、その意味を表す法助動詞がどのようなスタイルの中で表され得るか、また他の法助動詞の意味とどのように違うのか法助動詞間の意味の違いも含め探求することにする。

まず、法助動詞が表す複数の意味について論じるが、ここでは法助動詞とは can, could, may, might, must, need, have (got) to, ought to, should, will, would, shall を指していることにする。それらはその表す意味により3つのグループに分けることができる。それらを分けたのが図1である。

図1によると、法助動詞が表す意味は、グループIの許可～可能性、能力、グループIIの義務～必然性、グループIIIの意志～予測の3つに大きく分けられる。そして、そのそれぞれの意味を表す法助動詞は図の通りである。以下、それぞれの意味について、一体どの法助動詞がどういったスタイルの中で現れるか論じることにする（なお、グループIIのところで「課せられた」、「課せられない」とあるが、主語で表される人・ものに義務や必然性が課せられる場合が前者であり、それが課せられない場合が後者である）。

図 1. 法助動詞の意味<sup>3</sup>

### 3.1 許可～可能性, 能力

ここで用いられる法助動詞は, can, could, may, might であるが, 特に注目すべきは, それらの外因的法性の中の可能性の意味である。この可能性の意味ではまさにその使用はスタイルに依存する。例えば, can や could はっきりと断定しきれないことについての他の可能性もあるという控え目なニュアンスを出すために科学・技術文のスタイルなどで使われるし, may や might も同じ用法で同じスタイルで使われる (ただし, could は can よりも控え目, 丁寧なニュアンスをもち, might は may よりも控え目, 丁寧なニュアンスをもつ。また, may は can (あるいは might は could) に比べて可能性が低いこと, あるいは任意性が高いことを意味する)。そして, can の方が may より, could の方が might よりよく用いられるようであり, can, may の方が could, might よりよく用いられる。可能性以外の意味ではそれらは比較的风格の影響を受けない。

また, これらの法助動詞は一度あるスタイルの中である意味で使われると, そのスタイルの中でかためて何度も使われる傾向がある。

次に, 電気技術者による指示書 (技術文のスタイル) で発生し得る問題点を述べるのに用いている can の用法をあげる。ここで can は断定を避けるために使われている。

Problem. The plastic package *can* sustain internal damage when the lead is incorrectly formed. If the lead is not restrained between the bending point and the case, when being formed, the lead *can* flex at the case and cause internal damage.

(篠田義明他, 1986, p. 49)

次に、科学（数学）文で、等差数列が何であるか説明するのに用いられる妥当に選択できるものを、自分の叙述が描いている、ということを示すのに用いている *may* の用法をあげる。

To explain arithmetic congruence, let us start with an arithmetic progression. An arithmetic progression is a sequence of integers such as

3, 5, 7, 9, 11, 13,...

which we *may* also represent as

$a_1, a_2, a_3, a_4, a_5, \dots$

in which each term  $a_n$  ( $n$  stands for an integer) is generated by adding a common difference (here 2) to the preceding term. Hence we *may* define an arithmetic progression by the formula

$$a_n = qn + r$$

where  $n$  stands for the rank of the term  $a_n$  and has values ranging from 1 to infinity,  $q$  for the common difference, and  $r$  for the remainder obtained by dividing the term by the common difference.

(Huckin & Olsen, 1991, p. 544)

また、*may* は新聞や雑誌の時事文のスタイルで、不確定要素が多くて断言できないことを述べるのに用いられる。控え目にいう場合は *might* が用いられる。次は雑誌の例である。

Humans *may* owe their very existence to colliding comets, which are essentially dirty snowballs of ice and other frozen gases trailing long tails of debris. A comet landing on a lifeless world *may have contributed* the molecules that made living creatures possible. Earth's oceans *may have been produced* in part by a watery invader from outer space. We *may* also eventually owe our destruction to these celestial travelers. Many scientists believe it was the crash of a giant comet that killed off the dinosaurs and many other terrestrial species some 65 million years ago.

(*TIME*, May 23, 1994)

### 3.2 義務～必然性

ここで用いられる法助動詞は *must*, *have (got) to*, *need*, *should*, *ought to* である。この意味ではまさにスタイルによってどの法助動詞が使われるか決まるといえる。その選択の際、内

因的法性か外因的法性か、それが（主語に）課せられた法性を持つか（主語に）課せられない法性（提案）を持つか、が重要となり、そのスタイルに最も適したものを選ぶことになる。前者の区別はここでは義務的意味か必然的意味かの区別で、後者の区別は強制的意味か提案的意味かの区別である。must と have (got) to にはその他にニュアンスの違いとでもいうべきものが存在するが、内因的法性すなわち義務の意味においては、have (got) to の方が must よりも非人格的 (impersonal) で、そのことから have (got) to は「外的な力からくる義務」を、must の方は「自身からくる義務」を表すことになる。これもスタイルによる法助動詞の選択を考える上で極めて重要である。外因的法性すなわち必然性の意味においては have (got) to の方が must よりも（必然性の）意味が強いといえる (Quirk *et al.*, 1985, p. 226)。

must は論文や報告書、パテントを申請する文などのスタイルで、その義務的意味で多く使われる (篠田義明, 1988, p. 51) が、他のスタイルでは意味が強すぎて使われない場合が多い。他のスタイルでは後に述べる理由から have (got) to を使うことが多い。また、必然的意味では、義務的意味より少ないが、あらゆるスタイルで使われ、逆にこちらの意味では have (got) to はあまり使われない。need は must の否定形・疑問形として使われるぐらいである。

should は提案書のスタイルで、その義務的意味で多く使われる (篠田義明, 1988, p. 51)。should は ought to より formal でより多く使われる。

その他、義務を表す法助動詞として shall があるが、これは法律文書や宣言、契約書のスタイルに普通に見られる。ただ注意すべきは、この shall が未来というよりは現在の意味で用いられていることである。

次に、Fan Coil Unit を保護する手順を書いた報告書の中で、その指示を義務的な口調で与えるのに用いられている must の用法をあげる。

### 3.0 Action

- 3.1. All fan coil units to be transported and stored in the open *must* be covered to protect against rain and moisture.
- 3.2. Units *must* be covered prior to removal from the warehouse. Plastic (4 mil min.) or similar wrapping material should be used.
- 3.3. Temporary storage sites at assigned production staging areas *must* be above standing water levels.

(Mathes & Stevenson, 1991, p. 101)

次に、実験室での水銀中毒の安全対策に関する提案書の中で、提案をするのに用いられている should の用法をあげる。

To reduce the probability of mercury poisoning in the labs, additional safety measure can be taken. First, smoking, drinking, and eating *should* not be allowed in labs where mercury is handled regularly. Smoking is particularly dangerous because mercury vapor is inhaled directly. Second, an instrument to measure the amount of mercury vapor present *should* be purchased. The vapor *should* be measured during operation and after cleanup. Third, a special exhaust system *should* be installed to control the mercury vapor at the sources. The system *should* have a filtering system to collect the mercury before exhaust is released to the outside environment.

(篠田義明他, 1986, p. 177)

また, *should* はビジネスレターにおいても, 出荷の期間の限定などを提案するのに用いられる。次にその用法の例をあげる (なお, *will* の使用についてはのちに述べる)。

Dear Mr. Burdette :

We would like to confirm the changes to the contract to Order # GMT-001762.

1. You *will* require the heavy-duty suspension.
2. You request the 306 V-8 engine.
3. You *will* pay cash and *will* not use our financing program.

The above changes *should* not affect the delivery shedule of your pickup truck. However, they *will* add \$402.86 to the price. Your truck *should* be delivered in 10-12 weeks.

Thank you for choosing Athens Motors.

Sincerely,

(Elliot, 1989, p. 65)

また次に, 養老保険の文書の中でその義務を述べるのに用いられている *shall* の用法をあげる。

WITNESSETH that if the Life Insured *shall* pay or cause to be paid to the Society or to the duly authorised Agent or Collector thereof every subsequent premium at the due date thereof the funds of the Society *shall* on the expiration of the term of years specified in the Schedule hereto or on the previous death of the Life Insured become and be liable to pay to him/her

or to his/her personal representative or next-of-kin or assigns as the case may be the sum due and payable hereunder in accordance with the Table of Insurance printed hereon and the terms and conditions of the said Table (including any sum which may have accrued by way of reversionary bonus) subject to any authorised endorsement appearing hereon and to the production of this policy premium receipts and such other evidence of title as may be required.

(Crystal & Davy, 1969, pp. 195-196)

さらに次に、分割払いの契約書の中で用いられている義務を表す *shall* の用法をあげる。

7. Notwithstanding the termination of the hiring under Clause 6 the Hirer *shall* pay all rent accrued due in respect of the hiring up to the date of such termination and *shall* be or remain liable in respect of any damage caused to the Owner by reason of any breach by the Hirer of any stipulation herein contained and on the part of the Hirer to be performed or observed.

(Crystal & Davy, 1969, pp. 196-197)

### 3.3 意志～予測

ここで用いられる法助動詞は *will*, *would*, *shall* である。この意味においてもやはり、どの法助動詞が使われるかはスタイルに依存するところが大きい。*will* についていえば、やはり内因的法性（意志）と外因的法性（予測）を表すのだが、前者で用いられるのは、自分であれ他人であれ、将来の自分の行動に対して、その人が意志をもって行うつもりでいると思われる場合である。前者の法性はビジネスレターなどのスタイルで、将来の自分の行動を意志をもって積極的に行うつもりがあることを伝えるのに用いられる。他方、後者は新聞、雑誌、論文などあらゆるスタイルの文書で、単に未来を表すのに用いられたり、現在や未来に対して確信を持てないことに対しての予測を表すのに用いられる。全体としては後者の法性の方が前者の法性に比べ多く用いられるようである。ただし、未来時を表す *will* については、実際、意志を表しているのか予測（未来）を表しているかの区別はつきにくい。

*would* は前者と後者の両方の意味で *will* よりも控え目なニュアンスを伴って用いられる。

*shall* はこうした意味で用いられるのは極めてまれである。ただし、義務の意味ではあるスタイル（前に述べた）では普通に用いられる。

*will* の例については *should* の例文としてあげたビジネスレターの文書 (Elliot, 1989, p. 65), さらに次にあげる雑誌の例を参照のこと。

Saddam is already on the verge of winning an important U.N. concession : a partial

reopening of Iraq's oil pipeline through Turkey. Periodically Baghdad *will* be allowed to "flush" the pipeline of old oil—which the Turks claim is corroding the pipe—and fill it with fresh oil. Each flush *will* yield about 12 million bbl. of marketable oil, which would net Iraq some \$50 million, and there could be several such operations every year.

Turkish officials, who say they are sacrificing \$250 million annually in lost pipeline fees, insist that Iraq *will* get only humanitarian aid—not cash—in exchange for its oil. They promise to refine and use the oil domestically, so it *will* not upset the world petroleum market. The very idea of limited oil sales for Iraq is anathema to the U.S. But Washington *will* reluctantly go along with the Security Council plan because the U.S. does not want to offend Turkey, an important friend that allows American jets based on its soil to patrol Iraqi airspace. "Turkey is a good ally," says an American diplomat at the U.N. "We are sympathetic to Turkey's needs."

(*TIME*, May 23, 1994)

また、次の新聞の例も参照のこと。そこでは、*shall* も使われていることに注意。

WASHINGTON, April 29—"Anyone may so arrange his affairs that his taxes *shall* be as low as possible."

That maxim, written by Judge Learned Hand in a famous appeals court opinion 60 years ago, apparently applies to the tax authorities at the Internal Revenue Service as much as anyone else.

After months of fretting, word went out today that the agency had found a way to mostly sidestep a new law that requires that taxes be paid on a part of the market value of workers' free parking—a law that could have cost top I.R.S. executives more than \$800 apiece in new taxes each year.

The solution : Starting on Monday, parking spaces *will* no longer be reserved in their names.

The revenue agents and members of Congress have been scrambling ever since it turned out late last year that the parking tax law, much to their astonishment, would apply to them.

Under the new procedures, the agency officials *will* continue to be guaranteed free parking in one of the 79 spaces in the small garage under the I.R.S. headquarters on Constitution Avenue across from the Mail. But they may not be able to park in the same spot each day.

They *will* still have to pay a bit extra in taxes—a little more than \$100 in most cases with their years to come. But the small change in parking procedures *will* save many of the ...

(*The New York Times*, April 30, 1994)

予測を表す *would* の例は次のビジネスレター（報告書）から取って示すことにする。

Dear Mr. Blaine,

Alma Concrete Products is interested in leasing 4 or 5 acres of the former airport property located across from our plant on Bridge Street. We propose to use this property for storage of broken concrete and asphalt. If this is of interest to the City, please contact us to discuss terms of the potential lease.

The property *would* be used to store broken concrete, broken asphalt, and clean fill sand and gravel. These discarded products *would* then be recycled into usable construction materials. This should benefit the City economically and environmentally.

The plan *would* be build a secure fence around the leased premises. In addition to Alma Concrete, others could use the area to dump broken concrete and asphalt. They *would* first have to stop at Alma Concrete to have their load inspected and to gain access to the disposal site. Only concrete, asphalt, and sand and gravel *would* be accepted.

This type of operation *would* benefit the City by : ...  
(Mathes & Stevenson, 1991, p. 104)

意志を表す *would* の例も次にやはり同じくビジネスレターから取って示すことにする。

Dear Personnel Resources Staff :

We've noted with interest the bulletins on secretarial and administrative help that you send us on a regular basis, and we *would* like to inquire about your method of operation and your fees. Specifically, we *would* like to know whether you charge a percentage of the person's salary or a flat fee. We *would* also be interested in your guarantee. If the person leaves after a month's employment, is the fee refundable?

We *would* very much appreciate receiving your brochure and a current client listing.

Sincerely,  
(Elliot, 1989, p. 253)

また, Quirk *et al.* (1985, p. 220) では, 内因的法性と外因的法性の区別は, root (根源的法性) と epistemic (陳述緩和的法性) の区別で広くいわれているとのことである (陳述緩和的法性は話者の主張の力を「緩和」する)。実際, 荒木一雄他 (1977) には図 2 のような図が

	陳述緩和的	根 源 的
will shall	未 来 推 測	意 志 特性/習性
may	可能性	許 可
can	可能性	能 力 許 可
must ought (to) should	必然性	義 務
need		必 要
dare		大胆さ

図 2. 根源的法性と陳述緩和的法性<sup>4</sup>

あげられている。

ここで重要なのは、スタイルによってこの2つの法性のどちらかの方が好まれて使われる場合が多いということである。すなわち、ある文脈では陳述緩和的法性が好まれ、あるスタイルではもっぱら根源的法性の方が好まれるということである。例えば、新聞では書く人の個人的意見を控えるために陳述緩和的法性はほとんど用いられないが、逆に、雑誌や論文などで署名がしてある場合には、陳述緩和的法性は好んで使われる。また、根源的法性はくだけたスタイルであればあるほど多く使われ、逆に、堅苦しいスタイルであればあるほど他の表現にとって代わられるようである。

さらに、この2つの法性の区別は、法助動詞が表す「時」にも影響を与えている。例えば、陳述緩和的法性が表す「時」というのは根源的法性が表す「時」よりもずっと広く、陳述緩和的法性が現在時、未来時、さらには過去時を示せても、根源的法性では現在時しか表せないことも多くある。例えば、can は陳述緩和的法性では未来時に使えるが、根源的法性では普通未来時に使えず、代わりに (will) be able to を用いることになる。must についても can とまったく同様のことがいえる。

#### 4. おわりに

法助動詞の使用というのは、一文のみならず、文章全体のスタイルや文脈によるところが非常に大きい。特にスタイルは文章を書き出すその瞬間に決定し、文章を書き終えるまで効力を持ち続けることを考えれば、その影響力たるや絶大なものである。よって、法助動詞を効果的に使用しようと思えば、自分が書く文章はどのスタイルに当てはまるものなのか、例えば、科学・技術文（の報告書）のスタイルなのか、あるいはビジネスライター（の提案書）のスタイルなのか、考えなくてはならない。そうでないと、一文一文ばらばらの、全体としてまとまりのない文章ができてしまう。

また、作文のみならず解釈においても、法助動詞が表す「時」と意味を一文中で考えるだけ

ではその正確な解釈は難しい。一文中で考えるだけでは文章全体の流れというものを念頭において解釈は到底できない。解釈においてもそのスタイルを考慮しつつ進めていくことが筆者の意図をよりの確に読み取る方法だといえる。

さらに、英語研究のみならず英語教育においても、スタイルを意識した法助動詞の使用というものを教えるべきだと思う。現在の英語教育では学生は法助動詞を使用する際、一文中で日本語を英語に、あるいは英語を日本語に機械的に置き換える中で使用するだけで、スタイルに応じて表される微妙なニュアンスの違いなどというものはまったく考えてはいない。法助動詞は話者の心的態度（真実性に関する判断）を示すものなので、こうした法助動詞がスタイルの中で表す微妙なニュアンスがわからなくては決して相手の真意などわかるはずはないのである。だから、コミュニケーションを中心とした教育が実行されている今こそ、法助動詞においてもスタイルをも考慮して教えるべきである。

この論文では、このように法助動詞の効果的な使用を考える場合に重要な、文章全体のスタイルによって決定される法助動詞の使用について、「時」と意味、特に意味の面から実例を多くあげて論じてきた。これが英語によるより効果的なコミュニケーション活動をはかるのに少しでも役立てばと考える。

### 《注》

本論文は、1994年6月10日、東海大学にて行われた日本英語表現学会、第23回大会における本論文執筆者の研究発表「法助動詞の表す「時」と意味」の内容を改変・加筆しまとめたものである。

- 1) Quirk *et al.*, 1985, p. 219.
- 2) *Loc. cit.*
- 3) この図は、Quirk *et al.* (1985, p. 221) の図を日本語で書き換えたものである。
- 4) この図は、荒木一雄他 (1977, p. 344) の図を引用したものである。

### 参考文献

- 荒木一雄他『現代の英文法第9巻 助動詞』研究社. 1977.
- Close, R.A.: *English as a Foreign Language*, George Allen & Unwin LTD, 1976. (斉藤俊雄訳『現代英語文法』研究社. 1980)
- Crystal, David and Derek Davy: *Investigating English Style*, Longman, 1969.
- Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk: *A Student's Grammar of the English Language*, Longman, 1990.
- Huckin, Thomas N. and Leslie A. Olsen: *Technical Writing and Professional Communication for Nonnative Speakers of English, International Edition*, McGraw-Hill, Inc., 1991.
- 池田拓朗『英語文体論』研究社. 1992.
- 井上義昌編『詳細英文法辞典』開拓者. 1966.
- Jespersen, Otto: *The Philosophy of English Grammar*, George Allen & Unwin LTD, 1924.
- Jespersen, Otto: *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin LTD, 1933.
- Leech, Geoffrey N.: *Meaning and the English Verb*, Longman, 1971.
- Leech, Geoffrey N. and Jan Svartvik: *A Communicative Grammar of English*, Longman, 1975.
- Mathes, J.C. and Dwight W. Stevenson: *Designing Technical Reports, Second Edition*, Macmillan, 1991.
- 大塚高信, 中島文雄監修『英語学大辞典』研究社. 1982.

- Palmer, F.R. : *A Linguistic Study of the English Verb*, Longman, 1965. (安藤貞雄訳『英語動詞の言語学的研究』大修館書店. 1972)
- Palmer, F.R. : *Modality and the English Modals*, Longman Group LTD, 1979. (飯島周訳『英語の法助動詞』桐原書店. 1984)
- Quirk, Randolph and Sidney Greenbaum : *A University Grammar of English*, Longman, 1973. (池上嘉彦訳『現代英語文法 <大学編>』紀伊國屋書店. 1977)
- Quirk, Randolph, *et al.* : *Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, 1985.
- 篠田義明『技術英語の常識』ジャパンタイムズ. 1988.
- Strutt, Peter : *Longman Business English Usage*, Longman, 1992.

### 研究資料

- Elliot, Stephen. P. : *The Random House Book of Contemporary Business Letters*, Random House, 1989.
- 篠田義明他『科学技術英文のレトリック』南雲堂. 1986.
- The New York Times*, April 30, 1994.
- TIME*, May 23, 1994.